

Doctors File

ドクターズ・ファイル

vol.14025

吉田晃生院長

吉田整形外科(横浜市金沢区/能見台)

高度専門医療と地域医療、双方の経験値を診療に

一 医院の成り立ちについて教えてくださいませんか？

父がここから歩いて5分ほどの場所に開業した整形外科医院がはじまりです。

開業後、あまり時間をおかずして父が他界し、その後は多くの方に支えられてなんとか存続しておりました。

私は東京医科大学を卒業後、大学病院に勤務しておりましたが、医院を存続させるため地元に戻ってきました。

父亡き後の「吉田整形外科」を支えてくだ

さった医局の先輩方には、心から感謝しています。

リハビリテーションの充実を図るべく2017年4月3日に移転開院しました。



一 大学病院ではどのような診療をされていたのですか？

大学病院退職後、千葉県鴨川市にある亀田総合病院外傷センターに所属し、難易度の高い症例も含め、数多くの手術を手がけてきました。高度医療機関で培った経験を生かし、診療にあたっています。

一 貴院での診療はどのようなものになるのでしょうか？

一般整形外科診療が中心です。骨折治療、脊椎・関節疾患、スポーツ外傷、リハビリによる機能訓練まで、

地域の患者さまのニーズに応える医療をご提供しています。私は地域医療を実践する当院のような医院の医療と、

大学病院や総合病院での医療はきちんと役割分担がなされるべきと考えています。開業医として当院で診療できる患者さまをしっかりと診療し、手術や入院が必要である患者さまには病院へ紹介するという正確な判断が重要です。

一どのような患者さんがいらしていますか？

近隣にお住まいの方が多く来院されています。父の時代から長く通われている患者さまも少なくはありません。

当院のスタッフもこの街を地元とする者が多いので、スタッフ同士とても仲がいいです



痛みをごまかさず運動器リハビリテーションに注力

—新しい医院は、まるでホテルのような素敵な空間ですね。

リハビリテーションにはどうしてもスペースが必要なため、十分な空間を確保することが移転の主眼でした。移転後は、多くの患者さまに開放的な空間でリハビリを行っていただけております。

リハビリスタッフの増員や、先進機器の導入でリハビリの内容も充実したものとなりました。

患者さまにはお待たせしてしまうこともあるため、少しでも快適な空間で過ごせるようにインテリアにも気を配りました。握りやすい手すりを各所に取りつけたり、座ってゆっくり靴の着脱を行っていただけるようにエントランスをかなり広く取ったりと、使い勝手に配慮した設計です。



—特にリハビリテーションが充実しているようですね。

当院では痛みを薬剤などでごまかさない、根本原因にアプローチする治療にこだわっています。

痛み止めの処方が必要最低限にとどめ、症状の強いときだけに限定し、運動器リハビリテーションで筋肉強化、可動域訓練を行うことで、患部の痛みを取り除きます。「痛みがあるために動かさない」という状態は理解できますが、そのまま放置しておいてはいつまでたっても痛みの軽減にはつながりません。

リハビリテーションにより積極的に動きを出していくことが、根本か痛みを取り除くために必要なのです。

中には「痛み止めだけ出してくればいい」というお考えの方もいらっしゃいますが、長く通っていただく方の多くは、当院のこうした方針をご理解していただいているようで、浸透していると感じています。



—動きを出す具体的な方法は？

以前は物理療法が中心で、機器を使って温めたりけん引したりするリハビリテーションを主に行っていました。

しかし、結果を求めるとなれば運動療法も必要との考えに至り、現在は運動器リハビリテーションに力を入れています。痛みを取り除くことはもちろん、ケガをしてしまったら、今後同じケガをしないように、運動療法によって必要な筋肉をつけるためアドバイスもしております。こうした取り組みは、ケガを未然に防ぐ予防医学的観点からも重要なことです。現在は、定期的に慶應義塾大学リハビリテーション科名誉教授の木村彰男先生にご指導をいただきながら、リハビリを行っています。また当院でリハビリテーションの責任者を経験した、運動器に精通する柔道整復師が「さくら柔整治療院」を開業していますので、そちらとの連携も密に取っています。

—ほかにも特徴があれば教えてください。

より性能の高い新鋭の医療機器をそろえているという点でしょうか。

例えば診療の補助検査として低侵襲な超音波診断装置を導入しています。

また、骨粗しょう症の診断に用いる骨量測定機器には、大学病院でも使われている DEXA を採用しています。

実は骨量測定機器は温浴施設に置いてあるような手軽なものから、DEXA のように医療レ

ベル重視のものまでさまざまで、その正確性も機器により異なります。

より精度の高い機器で測定することで、正確な診断に近づけられます。また、専門外の診療は基本的にお断りしているという点も特徴といえ特徴かもしれません。地域開業の医院では、患者さまの求めに応じて専門でない診療科についても加療することはあります。

これは診療へのポリシーの違いですが、当院ではそれぞれ症状に合わせて専門の診療科の先生にお任せするという姿勢です。

痛みは大切なサイン。見逃さず知識を持つ医師に相談を

—先生が医師を志されたきっかけは？

やはり父への憧れでしょうか。あまり何かを強制することがなく、私を信じてあらゆることを「やりたいようにやれ」と任せてくれました。

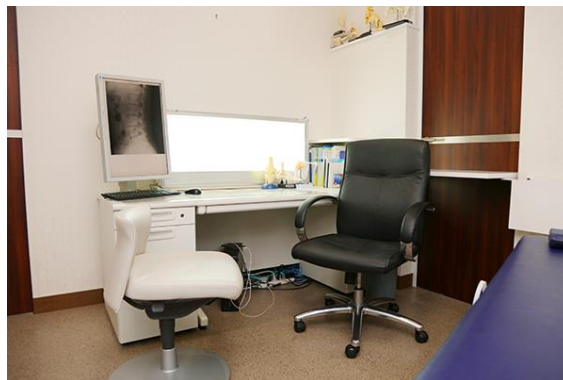
父への反発から「医師」という職業に目を背けた時期もありましたが、高校生の時点で一人暮らしをし、比較的早く親元を離れたことで違う目線を手に入れられたのかもしれませんが。早くに父を亡くしてしまいましたが、もっといろいろな話をしたかったと思うこともあります。

—今後の展望についてお聞かせ願えますか？

この街に限ったことではないですが、高齢化する社会に対応していくことはわれわれの課題だと思います。

さまざまな事情で通院が困難になった患者さまに対しては、「来られなくなったら終わり」ではなく、こちらから介入していく取り組みをし続けていきたいです。

今後は訪問リハビリテーションの提供地域の拡大をめざしていきたいと思っています。



—読者に向けてメッセージをお願いします。

痛みは体が発する重要なサインです。痛みがあっても我慢したり、自己判断で処置をして放っておいたりという方が多いようですが、痛みへの誤った対応は病を見逃すことにもつながります。鍼灸、整体、カイロプラクティックなど、痛みに関わるさまざまな「先生」がいる中で、正しい知識を持つ「先生」に相談することはとても大切なことです。痛みを感じたら、まずは気軽に専門知識をもった整形外科の医師にご相談ください。